

三好達治全集

5

二好達治全集

5

筑摩書房

三好達治全集第五卷

昭和三十九年十一月十五日發行

著者 三好達治

發行者 古田晁

發行所 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京 〇七六五一（代表）

振替東京 四一 二二三

印刷 株式會社 精興社
製本 株式會社 鈴木製本所

三好達治全集第五卷目次

萩原朔太郎

萩原朔太郎詩の概略	九
朔太郎詩の一面	二三
『詩の原理』の原理	二三
『路上』	一五〇
萩原さんといふ人	一五〇
假 幻	一六
後記 二	一九
あとがき	三三
三好さんとの二十年（伊藤信吉）	三四
萩原朔太郎補遺	
『虚妄の正義』に就て	四五
詩集『氷島』に就て	四九

日本語の韻律	二五七
萩原朔太郎氏へのお答へ	二六二
無からの抗争	二七七
わが愛誦詩	二七九
師恩	二八二
詩碑	二八四
脱俗に徹した『息子』	二九〇
静物	二九六
ころ	三〇五
私の好きな詩集	三二七
解説（創元社版『萩原朔太郎全集第一卷』）	三三〇
解説（創元社版『萩原朔太郎全集第二卷』）	三三五
あとがき（岩波文庫版『萩原朔太郎詩集』）	三三〇

詩集『月に吠える』に就て（新潮文庫版）	三九
詩集『青猫』に就て（新潮文庫版）	三四五
あとがき（新潮文庫版『純情小曲集、氷島、散文詩』）	三四九
『四季』の詩人たち	

堀辰雄君に	三五七
堀辰雄の文學	三六一
堀辰雄君への手紙	三七〇
堀辰雄君のこと	三七七
竹村俊郎詩集『十三月』讀後に	三八四
増田篤夫さんのこと	三八八
丸山薫君の新著『一日集』を讀みて	三九一
詩集『在りし日の歌』	四〇二
立原道造君	四一一

伊東靜雄君を悼む	四一五
伊東靜雄君	四一九
『伊東靜雄全集』評	四二〇
『我が愛する詩人の傳記』評	四二二
『室生犀星全詩集』評	四二三
『われはうたへども やぶれかぶれ』評	四二四
土澄みうるほひ	四二六
足 音	四二八
詩の人・室生犀星	四三一
犀星詩	四四七
解 題	四五五

萩原朔太郎

萩原朔太郎詩の概略

一

萩原朔太郎論と題を課されたが、果してこの文章が課題にそふやうなものになるだらうか、少し心もとない。萩原さんのことは、その作品に就て、その人柄に就て、その思想と日常生活、あの人のはまりをとりまく人々とあの人とのつながり方に就て、一度はいつか一まとめに書いて置きたいと、これは永らく考へつづけてゐながら、その機會も幾度かあつたに拘らず、私はその都度いつもためらひ勝ちな氣持にとらはれて稿を起さうとしなかつた。億劫がりな私の筆不精にもよることだつたが、私にとつては、この詩人は、いつも一つの眩暈を伴つて見える明確にして不確かなまばゆい存在だつたから、ひと口にいへば甚だ勝手が惡かつた。萩原さんといふ人は、あの詩がさうであるやうに、その中ではある無秩序が微妙に諧和を保つてゐる、いはば一つの波浪のやうな人格者で、そのぎりぎり結着の評價の照準のおきどころは、ただ一つ、何といふか、人の嗅覺に訴へてくる香氣のやうな點にある。それはつねに浮動的で、理詰めに割出す論理の外、數量のはかりの外ではかつてみるより手だてのない、いつさい靜止をこばむ對象だつた。私にはさう思はれた。今も私には

さう思はれる。

『新しき欲情』や『虚妄の正義』の感想論文抗議逆説の類を仔細に檢してみるのがいい。誤解や矛盾や撞着は頁ごとに溢れてゐるし、とり上げられた問題自身に對する理解の不充分疎慢偏見は枚舉にも應接にもいとまのない位な人だつた。これはまた後にもふれる折があらう。その無頓着にも手落ちにも健忘症にも、呆れる人はただ呆れるだらうが、それがこの人の人柄まる出しの一種無邪氣な八つ當りだつたその不用意には意味がある。そこまでは考へないでも以前私などはただその八つ當りにも強い興味を覺えた。今は必ずしもさうではない。さうではないが、兩書は唯今の私にも依然として感興を覺えしめる書たることに變りはない。私は今日もそれらのところどころを拾ひ讀みしながらついつい讀み耽つてしまつた。回顧的な興味からではない。今日私がこれらの書にはじめて出會つたのだつたら、私はもつと熱心に夢中になつて讀み耽つたに違ひない。こんなに誤謬に満ちた粗笨な缺點だらけの書物がどうしてこんなに人々を（——近頃になつてまたこの兩書は某某書店から新刊されてゐる）不思議な魅力でとらへるのだらう。これは後に考へてみよう。

『月に吠える』と『青猫』の二冊の詩集は、しかしながらその他のものの合計よりも萩原さんにとつては大切なかけ替へのない大きな仕事だ、これはもう論がない。兩詩集のずつと後に出た『純情小曲集』中の「郷土望景詩」十一篇はある意味でこの詩人の最高頂點を示す作品だが、これが前二者に對する比較と計量は後に譲らう。それにしても情感の豊かさ、この詩人の詩技の十二分なる發揮と驅使、その花盛りなる季節はこれを後者に於てではなく前二者に於てこそ見るべきだらうから、

素直に世論に従つて前二者を推すに私も賛成だ。後者は前二者の時を隔てた收束音だ。さうして更にその後の『氷島』一卷はもうこの人の聲韻のかすれ亂れた頽廢期以後のもので、これはもう「郷土望景詩」からの發展ではない。著者自らはさう主張してゐられたが、著者の自説と雖もうけがひ難い、——論證は後に譲る。

「郷土望景詩」をそのエピソードと見るならば、主著二卷に先だつプロローグに恰も相當するのは「愛憐詩篇」と題されて同じく『純情小曲集』中に前半を占める十八篇がまさしくそれだ。この黎明は素晴らしい。後來のものを頭に置いてこれらを仔細に見るならば、そこにはこの人の資質と詩技との特徴が一々數へ上げられるやうに分明に肩を寄せあつて押しあつてゐる。試みに二三を擧げてみよう。

夜汽車

有明のうすらあかりは
硝子戸に指のあとつめたく
ほの白みゆく山の端は
みづがねのごとくにしめやかなれども
まだ旅びとのねむりさめやらねば
つかれたる電燈のためいきばかりこちたしや。

あまたるきにすのにほひも

そこはかとなきはまきたばこの烟さへ

夜汽車にてあれたる舌には佗しきを

いかばかり人妻は身にひきつめて嘆くらむ。

まだ山科は過ぎずや

空氣まぐらの口金をゆるめて

そつと息をぬいてみる女ごころ

ふと二人かなしさに身をすりよせ

しののめちかき汽車の窓より外をながむれば

ところもしらぬ山里に

さも白く咲きてゐたるをだまきの花。

調は五七と七五が巧みに轉調しつつ縋ひませになつてゐて、それを軸にさらに不規則な字餘りが（この方が數量的には多い）それを外からおし包むやうにからみあげて婉轉自在な自由律、意にまかせて規には従はぬふりの緩徐な流露體をなしてゐる。語は文語體に従つたふりではあるが「あまたるきにすのにほひ」といひ「夜汽車にてあれたる舌」といひ「空氣まぐらの口金をゆるめて」といふあたり、これはもう一時代以前の所謂古雅なる文章語體そのものではない。この詩の主題が既にさうではないやうに、この用語の「ふしぎに典雅な」（著者自序）みやび

は既に心あつて撰ばれた見せかけの服飾めいたものにおほかたは脱化し了つてゐるので、單純に古風で典雅な譯ではない。

この作者はこれらの作品を草した頃（大正初頭以降と推定される。その時分からこれらの作品は著者の胸裡に胎生しはじめてさまざまの形に推敲され、ひねくりまはされ、それが今日の形にましまつて「創作」「朱變^{ザムボウ}」その他の誌上に發表されたのは大正二、三年の交。）より更に數年以前、北原白秋の『邪宗門』（明治四十二年）『思ひ出』（同四十四年）にはじめて接見してそこからうひうひしい最初の詩的啓示を得たと、嘗て私は著者の口づからそれを承つた記憶があるが、それは事實さうであつたらうけれども、現在我々の眼前にある「愛憐詩篇」はそれかといつて白秋の前二著の影響下のものかといふと、必ずしも左様の印象のものにはうけとられぬ。萩原さん自身は自らの出自を北原白秋とこれはずつと後まで變らず認めてをられたし、世間もさういふことに承認してゐるのであるが、私ら後生のうけとり方の上でこれをいふとその血縁は案外稀薄なものやうにしか考へられぬ。

ついでだから云つておかう。白秋自身は後の『月に吠える』のためには巻頭序を寄せてゐるし、その序に示された理解と共感とは必ずしも見當違ひではないが、後年白秋が雑誌「近代風景」を主宰してゐた當時の白秋の口づから、折にふれ私の洩れ聞き觀測したところでは、この先達は著しくこの後輩のために、理解と同情と同感とを缺いてゐるのが明らかに認められた。ために私はその後『月に吠える』序を讀みかへしてゐるごとに何か空々しい繪空ごととしか、これを認め得ない慣はしとなつた。僅か十年ばかりの時代の前後ですら、このやうな理解の齟齬を示すためしは詩壇に決

して實例の乏しい現象ではあるまいけれども、それと共にまた兩者の血縁の本質上のつながりが實は案外稀薄なことに、元來それは由來してゐるのではあるまいか。私にはどうもさう思へる。

「愛憐詩篇」の見かけの上の典雅、「何かしらあやめ香水の匂ひがする」(著者自序)といふその雅趣は、もはやあのきらびやかに手のこんだ『邪宗門』『思ひ出』系流の線上にひき延ばされた、それをその價值とし生命とするところの粉飾體ではない。なるほどそこにもなほそくばくの外衣としての粉飾、——粉飾に似た何ものかがないではない。しかしそれはその内容をわづかに包みかくすことによつて、そのつつましげなふりによつてその内部をいつそう露はに訴へようとする構想、とも云ひうる仕組みになつてゐるのが看取される。實をいへば、この「夜汽車」——及び「愛憐詩篇」一般の内容内部はさほど際立つて強烈ではない。そこで私のここにいふところの意味は或は曖昧に墮ちるかもしれない。もう一つ例をあげよう。

ところ

ところをばなににたとへん

ところはあぢさゐの花

ももいろに咲く日はあれど

うすむらさきの思ひ出ばかりはせんなくて。